

4—冬の夜の風景

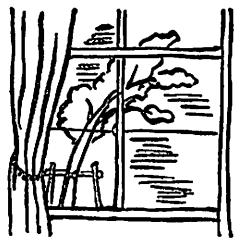
(1) 寮母は走る

暖房はすでに落ち、冷えゆく廊下は部分照明でうす暗い。森閑として余りにも病院的である。しかし、注意深い人ならば、音もたてず動き回っている二つの影法師を見るであろう。

老人の安らかな眠りのうちには、夜勤寮母の孤独な働きが夜を徹して続けられている。石油ストーブが赤く燃えている寮母室にはその夜の主の姿はいつも見えない。寮母を呼ぶナース・コールが鳴らなくても、各室を一人ずつ見回っているからである。

夜更けて廊下を歩いていると、生を守る人たちの営みに、それが無言でなされるだけに、なお何かしら熱いものを感じないではいられない。

寮母が書いた「ある夜の手記」(52年の冬)を読もう。



夜勤の寮母は二名で、午後二時から出勤します（現在は午後五時に変更）。これは老人の身体の具合や心理状態をよく知っていないと、夜間のお世話ができないからです。おむつたたみの作業をし、午後五時三〇分から夜勤が始まります。看護婦より要注意者への投薬、介護の指示を受け、他の寮母との引継ぎ、打合わせをします。

▽おむつ・尿器替え

仕事の打合せ中もナース・コールが鳴ります。とんで行くと排尿の知らせです。寝たままではどうしても用の足せない人を、二人で抱えてトイレまで連れていきます。寝たきりの人のおむつは汚れたつど取り換えます。回数は多い人で十八回、おむつの枚数は三枚としていたので、褥瘡のできた方はありません。尿器も排尿のつど捨てておかないと、手元がおぼつかないで、シートも衣類も汚してしまいます。

子供がお寝しよをした時は叱ってすみませんが、老人の場合は心が痛みます。しくじらないよう寮母がいつも心を配ることが大切です。用便の近い人には早めに声をかけますが、「そんなにいわんでも分かっている」と叱られると、次の時注意が遅れて、シートも着物も換えねばなりません。

▽おやつ

午後七時はおやつの時間です。夕食五時なので、それから朝までの夜は長く淋しいものです。せめて七時におやつをと考えました。おやつにも家庭の味をと工夫します。今晚はホットケーキです。「夕食のオムレツを作るのに厨房が忙しかったので少し焦しました。ごめんなさいね」。おしゃべ

りしながら配ります。「こんなものは食べられない」と叱る老人。「三度炊くご飯も難しい、良いですよ」といって下さるお婆あさん。でも家庭を離れている老人には、こんな憤りや、女どろしの料理についてのやりとりは嬉しいようです。その間にもナース・コールは鳴ります。さっき叱りっぱしのおじいさんが「焦げたのもうまかったよ」と声をかけるのです。おやつは一週間のうち、五日間は手づくり、二日間が市販のもので、夏と冬とは当然ちがいます。

助食者 十名、一部助食 十名、ひとりで食べる者 三十二名。

おやつの種類——夏（ゼリー寒天、水ようかん、泡雪、プリン、バナナミルク、フルーツ寒等）

冬（ドーナツ、むしパン、ホットケーキ、きんとん、プリン、お好み焼、大学芋、柚ようかん等）

▽扶助費二千元（後に三千元、現物支給）

今日は入浴日でした。八時たばこを配る（その頃は火の用心のため喫煙は時間ぎめ、今は完全に自由）。皆よく眠れるだろうと思っていたら、ナース・コールがよく鳴ります。痴呆症のYさんが「今日もらったお金をとられたばい」「こん部屋に泥棒がいる。ドロボウツ！」大声で叫びます。毎月現金二千元をおこづかいとして渡します。ここに来るまではお金のなかったYさんは、お金に關しては極度に悪意に考えます。Yさんの財布の中から札を一枚々々手に握らせ、硬貨は音をたてて数え、確かめてあげると、「あるなら、よか」。安心します。こうして一人が騒ぎ初めると、あちこちからナース・コールが鳴り始め、「おむつが濡れた」と、濡れてもいないのにぐずるのです。

▽布団かけ

夜の早い老人は九時には眠りについていません。暖房のため夜着をはいでいる人にはそっと掛け、電気毛布の調節をして回ります。昼に毛布の電源を切ったままだと、ひと晩中身体の暖まらない人もあり、寮母の少しの不注意が風邪をひかせることになるのです。矢倉フミさんは夜着の裾や衿元を押えてあげると、「こうして見回って下さると安心して眠れます」と手を合わせます。

電気毛布使用者 二十六名、電気こたつ 十二名、未使用 十三名、ホームこたつ使用 一名。

▽痴呆症

おむつを換え、体位交換がすむと十時です。突然大きな声が響き渡ります。つい最近入居してきたSさん(八八)は寝つかれないようです。身体中がだるいと言って苦しむのです。手足をさすってあげると、「おおきに」といって、寝るのですが、ひとりになると再び騒ぎ、ベッドから落ちそうになります。「ここに居ては家が困る。わしが帰らんと息子たちは何もできんのじゃ。降ろしてくれ。ああ、はがゆいのう」と身もたえするのです。

隣りに寝ているGさん(八八)もはじめのうちは「すぐ慣れるよ」と慰めていたのですが、とうとう、「やかましい、寝られん。わしは帰る」といい始めるしまつです(帰る所はありません)。寮母室の隣の静養室に畳を敷いてSさんに移し、交代で抱きながら夜の明けるのを待ちました。この頃はSさんも注射投薬等でだいぶ落ちついてきました。病気で倒れる八十三歳まで、一生けんめい働き続けた人なのに、あかぎれだらけの指を見るたびに痛ましく、少しでも安眠ができ、平静な体に戻ってほしいと祈ります。

重度痴呆症 一名、中度 四名、軽度は全員といつてもよい。

▼脱荘

午後十一時半より夜勤の一人は三時間の交替で仮眠に入ります。一人は各部屋を見回り、体位交替、尿器使用、おむつ換えをしながら異常はないかと注意します。

某夜、Aさんのベッドは空です。便所へ走っていきましたが居ません。Aさんはまだ若く、言語障害と半身不随で足も不自由です。言葉が話せないので直ぐにハラをたてます。奥さんが見えると急に気短くなり、イライラします。最近是不安定で荒れぎみでした。寮母は宿直者と二人で二手に分かれ、暗闇の中を駆け出しました。残った一人はホームの中のおせわをしなければなりません。高い崖から下をのぞく時は足が震え、祈る思いでライトを照らします。いません。家恋いしの一念で、家に帰ったのではないかと、三キロ余りの老人の自宅まで走る。家の中は何事もないように静かです。声もかけられず引返す。

防空壕のある道はずれまで来ると、岩の上で何か黒いものが動きます。Aさんです。「アーア」というばかり。生きていた嬉しさで、思わず抱きついてしまいました。みると老人の下半身は小水でベトベトです。ホームに帰りついたのは午前三時でした。

▼ナース・コール

Aさんのことでホーム内のお世話は十分ではありません。ナース・コールが次ぎ次ぎ鳴ります。走っていくと、Hさんが汚物をベッドや包布に塗りつけて、臭くてたまらんと同室者からの苦情で

す。脳軟化症のHさんは自分の排便を気持ち悪がって、周囲に塗りつけてしまうのです。昨日から排便を気にしていたKさんも浣腸をしてほしいと訴えます。子供と同じで、ひとりが訴えると連鎖反応を起こし、異常事が起きると敏感になり、つぎつぎにハプニングが起きます。

▽便所掃除

午前五時になると、トイレの掃除です。Sさんは便所の紙をちぎる病気です。油断していると一夜でトイレの紙がなくなります。夜は何回もベッドとトイレを往復し排泄を気にします。寮母がトイレに行くのを止めようものなら狂暴になります。六十二歳と若い故に「母ちゃん母ちゃん」とホームの中を夜昼なく探し歩きます。そういう時はよく注意しないと、ズボンの中に排泄したり、便所や廊下一面が汚物で塗りたくられています。他の入居者の朝の目覚めまでに掃除がすまないと迷惑をかけることになります。トイレトペーパーも補充しておかねばなりません。

掃除の終る頃には、寝たきりの方の排尿のナース・コールで一段と忙しくなります。

六時になるとぼつぼつ眼が覚めて、身仕度が始まります。朝の布団は全員たたみます。このホームでは廊下は往来と同じなので、ふだん着にかけてサッパリした服装になります。顔を洗い歯を磨き髪を梳き、少しぐらい不自由でも手の拭ける人は自分でおしぼりを使ってもらいます。

各人の茶殻を捨て、新しいお茶を入れ、床頭台を拭くと、皆は礼拝室（仏間）にお参りするまでのひとときを、一杯のお茶に談笑したり、元気のよい人は隣の寝たきりの人にお茶をあげたりするのです。

(2) ナース・コールは命綱

東京都某施設の指導員の報告文の中に、家族からその施設に対する幾つかの苦情を列記した部分がある(『老人福祉』54年・56号・全社協)。どうしても見逃せないのも、一部を転記しよう。

「おむつは一日何回換えるんですか。少しひどいようですが……」

どぎつい幼稚園なみな扱いはさけて、人生の先輩だという気持ちで接してほしい。優しい顔、優しい言葉を希望します。

老人が寮母を呼んでいる時、代りに呼びに行くが、殆んど来てもらえない。……」

これらの苦情も、老親をホームにお願いしている身であるから、控えめに述べられているが、極めてもっともなことばかりである。問題は家族からこんな初歩的な苦情がよせられていることである。こういう実態であるなら、この老人ホームはホームではなく、まさに養老院であるといわれねばならない。たとえ近代的な建物で粧われようと、中身は旧態依然たるものである。自分のホームに対するこんな苦情を発表するという神経も理解しにくい、案外、この指導員はこれが致命的な欠陥であることにも気付いていないのかもしれない。

「寮母を呼んでも来ない」とは、このホームはどういう処遇の仕組みをとっているのだろうか。全く理解できない。だいいち、呼びに行くということがおかしい。ナース・コールの呼び出しベルが

あるはずではないか。電源を外しているのだろうか。

「老人ホームの運営基準」(前掲書・厚令19・21号)の「介護」の項について、二十一条「特別養護老人ホームは被收容者に対する介護を常時行うことができるように職員勤務体制を定めておかねばならない」とある。この基準に対する重大な違反とされねばならない。

某研修会分科会(老人生活研究所主催・55・2・4長崎会場)で、某施設の発表に「夜十一時から翌朝五時までは一切老人の呼び出しには応じない。夜勤寮母二人は揃って熟睡中」とあり、その場の半数の施設がほぼ同じような実態であった。

ナース・コールは老人の命綱である。それだけが老人の意志を寮母たちに伝える唯一の方法だからである。

月刊誌『老人生活研究』(54・10・103号)に転載された『にんうん荘』(22号)の足立月子の小文を見よう。

ナース・コール

利用者の枕もとに一本ずつ備えられているナース・コール。これは緊急の時ブザーを押せば、いつでも寮母がかけつけられるようにとの配慮です。「ピン・ポーン」軽快な音が響き渡ると、寮母は仕事の途中でも現場に走っていきま

最近、このナース・コールの回数が多くなりました。精神状態の不安定な老人は、一日に何十回と呼ぶのです。特に夜間は寮母二人となるため、一晚中ナース・コールにふり回されることが少なくありません。今日も便が出た老人のおむつ交換をしている寮母の耳に、ナース・コールの音が響きました。あわてて便の始末をし、新しいおむつを当て、着物の前を合せるのももどかしく、走って行きます。目印のランプがついているのは「すみれ」の部屋。ついさっきAさんのおむつを調べたばかりです。

「何んでしょうか」といいながら灯りをつけ、部屋の中を見渡す。返事がない。Aさんは眠っているようです。一人ひとり顔をのぞきこんでいくと、Aさんがやっと眼を開け、「オシッコ」という手を入れてみると、尿は出ていません。

「Aさん、おしっこ出ていませんよ」というと、やにわに手足をばたつかせて暴れ出します。こうなったら聞かないAさんの状態を知っている寮母は、おむつを外し、それを裏返えして老人にあてます。「はい、これで大丈夫よ。ゆっくり休ましましょうね」。老人の顔から狂暴さが消え、子供のよくな無邪気な喜びの表情が広がりました。

再び別の所からナース・コール。今度は、暑いから電気毛布の温度を下げてくださいという老婦人。みると電気は既に切つてあります。神経質な老婦人は、電気毛布のわずかな温度差で、暑い、寒いを繰り返すのです。同じことが何度も続き、さすがにたまりかねた寮母は、「おばあちゃん、寮母さんは、何度でも来るのですから、いちいちナース・コールを押さないで下さい」と思わずいって

しまいました。しかし、耳の遠い老人は聞えないのか、「エ？」と寮母の顔を見上げます。いらだちながらも一度説明しようとして、耳もとに顔を近づけた寮母は、思わず喉まで出かかった言葉を飲みました。布団の下で、老人はすがりつくようにナース・コールを握りしめています。愛しいものを抱くように、胸の前でしっかり握りしめているのです。

眼の前の小さな老人を、たった今傷つけようとしたことに鋭い痛みを覚えながら、「はい、温度差を一度下げましたよ」といって、ラク呑みで水を含ませます。おいしそうに水を飲んだ老婦人は「アリガト」と手を合わせ、再び大事そうにナース・コールを胸にします。

老人にとってたった一本のナース・コールは命綱であり、もしかしたら、求めてやまない肉親への愛なのかもしれません。

老人の要求するものが何なのか。それに答えていく仕事の大変さを感じながら、きょうも私たちは走ります。

(3) 夜の独り言

年寄りには皆寝静まった。夢路を辿りながら心の中で対話を始める者も多い。大声で叫ぶ者。声にもならずぶつぶついついてる者。この人たちは夢現の境もないままに、心の深層を激しく駆け回っているのであろう。独り言は本当は心の中の誰かとの対話なのだ。

長い夜勤から解かれた寮母はほっと息をつくと昨夜の老人のつぶやきが心に残っている。そのことも引き継ぎとして語られる。聞く者にとってもただ聞き流すには余りにも惜しい内容もある。心打つホンネも流れている。あの老人が内心そんなことを考えていたのか、と見直さねばならなくなる。「まま炊いたか」―夢でいう言葉はいつも決まっている倉原さんの心に、寮母たちは同じ思いに結ばれる。

これがこの人の最後の言葉になるかもしれないと思うと、語り棄ての話題にしてしまうには余りにも惜しい。そう皆が気づいて、メモにとめようと思いついた時はすでに三年も過ぎた五十三年七月であった。

『夜のつぶやき』と題された帳面に、とりどりのメモが書き継がれていく。もう七百をこした。意味の判じにくい言葉が混じっているのも、それなりにリアルである。そのごく一部を見よう。

53年

某月某日 小代叔馬氏、小代さんにとって天皇陛下は命と同じ大切な存在。「末息子のトシが入営の運びとなりました。いよいよ最後の息子を陛下にささげます。これで思い残すことはありません」。トシさんは二十歳でなく四十五歳よという、「へー ふんなり 夢をみちよったんじゃるか」と答える。

勤労感謝の日 ごちそうに喜び、食後得意の「四海波」を歌う。声量は豊か。

某月某日 小代氏、「ヨイオイ」と大声で呼んでいる。かけつけると、「タモウくりイタモウくり」とアーンと口を開ける。アメ玉を一つ口に入れると、満足げに眼をとじる。ふと寮母を見上げ、「アンタも食べ」と。今お腹がいっぱいというのと、「ほんなら、何をあぎゆうか。サオはもう役に立たんしのう」。急に顔をクシヤクシヤにして笑う。

某月某日 小代氏、早朝から大声で叫ぶ。「小代叔馬、たった今あの世とやらへ旅立ちました。さようなら、さようなら」。「皆さん大変お世話になりました。ありがとうございます。ただ今からあの世へ旅立ちます。さようなら、さようなら」。

某月某日 小代氏、熱っぽい。「もう死んだ、死んだ」と口走る。

(注——50年6月入所して53年2月死亡)

54年

某月某日 午後八時、山内タメノ、「おぼちゃん」と呼ぶので、なんねというのと、警察を呼ぶという。どうして、と聞くと、「あんた、ひとのむこさんとられてハラがたたんネ」という。

その翌日 山内さん、「じいさん、オーイじいさんよーい」と大声で叫ぶ。じいさんどこに居るの、と聞くと、「そこにいるじゃねえか、今女ごがあっちへ連れて行ったばい。女ごと遊んじより

やいいことはねえばい」と興奮、「お金がねえ」「着物かけて」と叫ぶ。

某月某日 穴見、午前0時、スリッパの音をパタンパタンしながら寮母室に来る。「今荷物を片づけるき箱があったら、くれナー」。あす朝みつけてあげる、というと、「朝早よう帰るき。あん白い服着た男は悪いやっちゃーどれんこれん女に手をつけちよる。ちゃんとおれ一晚中寝らんで見ちよるんデー、寮母にヤクルトやったり、一回は金をやっちゃよる。ちゃんと見ちよるきなり、きょうの寮母にばぼをしよるデー」。

某月某日 工藤ユワキ、十時おむつ換えに行くと、高松さんの布団の上にあるねんねこ半天を指さして、「あのブクをくれなあ、着て、お産に行ってくるから」という。

(注——ユワキさんは元産婆さん)

某月某日 午後十時半、穴見、寮母室の方へ急いでくる。「若い者おらんかな、早よ水ははずしに行かんと田がくえちしまう」。十二月だから田んぼに水は入ってないよというのと、「ああ、そうなる麦が植ちあるんか」と安心して出ていく。

55年

某月某日 十一時、ブツブツ声がするので大津さんの部屋に行くと、ベッドから降りようとしている。ジーッと寮母を見つめはつきり話すが、幻覚。「みえちゃん何んしよるんな」「みんな今炭を焼きよるんな」「ちょいとそこんを片づけんならん」興奮きみで話す。

某月某日 倉原さん、四時おむつ交換の時、手を合わせ念仏をとなえている。四時四十分、ミツチャンと呼ぶ。はいと答えると、「小さいハガマでママ炊きな」まだ早いでと答えると、「そうな、まあ、いいわ、二合半とぎなあえー」。

某月某日 夜の帳がおり始めた頃、ガラス戸に写った民家の灯を見て工藤ユワキ氏いう。「あそこに尊いものが描かれている」「楠正成がお父さんに頭を下げている」。